



1980 年 (昭和 55 年)

4 月号 (No. 418)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

- 日本中央大山系横断記(近藤信行) …(1)
- ポーランド隊の厳冬期エヴェレスト(2)
- 海外における JAC チョモランマ遠征への関心(鈴木郭之) …(3)
- 第17回「この一本展」より(3) …(4)
- 図書紹介 …(5)
- 東西南北 …(7)
- 各委員会の報告とお知らせ …(7)(11)
- UIAA の退会(海外連絡委員会)
- 5月3日山研オープン(山研委員会)
- 雪崩講習会報告(遭難対策・学生部委)
- 山スキー講習会報告(指導委員会)
- 雪害実験研究所見学報告(科学研究委・集会委)
- 東良三氏の旧蔵本(図書委員会)
- 「ソマヴェルの油絵」複製画配布(海外連絡委員会)
- 東九州支部20周年記念山行のご案内(10)
- 会務報告・ルーム日誌・会員移動ほか(10)
- カット/芳野満彦・松本慎太郎・吉阪隆正

- ▶ 日本山岳会事務取扱時間  
月、火、木、土曜 10時～20時  
水、金曜 13時～20時  
日曜・祭日は休み
- ▶ 図書室開室時間  
日曜・祭日・月曜を除く毎日  
13時～20時

# 『日本中央大山系横断記』について

近藤 信 行

小島鳥水の「鎗ヶ嶽探険記」は明治三十六年、「文庫」に九回にわたって連載されたのだが、その最後の「拾遺」に、彼はつぎのように書いている。

△横濱なる牧師、英人ウオルター・ウエストーン氏が倫敦より出版したる「日本アルプス帯登山探険記」、鎗ヶ嶽に登山を企ててより二年目に之を成就し、その記事に前後二章を費せり、他日閑を得ば訳して世に示すと共に、この稀有なる外容の登山家を紹介すべし。△

槍ヶ岳登山のあと、ウエストーンの著作に接した鳥水が、その本の翻訳、その著者の紹介をおこなおうとしていたことは、この文章からよく理解できる。この箇所は、「山水無盡蔵」上梓にあたって大幅に改題され、書きくわえられて

いるので、「文庫」初出文によるのではないのだが、鳥水のウエストーンへの傾倒ぶりの一端をしめすものとして読むことができる。

ウエストーン紹介文は、翌三十七年九月の「中学世界」に発表された「日本山水論」に収録されたが、翻訳は発表されなかった。△他日閑を得ば…△というねがいがかねえられなかったものとおもわれる。しかし鳥水はその十月月ほどまえに「日本アルプスの登山と探険」の抄訳をおこなっていたのだった。「日本中央大山系横断記」がそれである。

「小島鳥水全集」を編集して、このたび私は、小島家につたわるその自筆稿本をたたくみせていただき、鳥水の精励勤勉ぶりをあらためて知らされるおもいをし



稿本は半紙判袋とじ六十二丁(二四頁)から成る。表紙には横書きで「The Japanese Alps/日本中央大山系横断記」とある。

だが、本文は鳥水独特のこまかな文字で、ぎっしりと書きこまれていて、原典を参照しながら訳文をたどってゆく、あるところは文語文体による完全な逐語訳であり、ある箇所は紀行の梗概として、あるいはまた訳者の説明文によってまとめられている。

△とあり、その下に「日本中央大山系横断記」ウエストーン氏著 小嶋生縮訳」としたためられている。一八一頁目には「明治三十六年三月十五日訳了」とあり、末尾には、槍ヶ岳、穂高岳の写真をなぞったスケッチ四点がそえられている。七十七年まえの原稿のことゆえ、表紙・裏表紙は褐色に変色して、破損のおそれもあるほ

精神として認む」というようなかたちで叙述されるのだが、序文、第一章から第十六章、附録A B 二章にいたるまで、鳥水の読みこんだ跡がはつきりとあらわれている。英語やフランス語による山地地形の表現をいかに日本語化するか、登山用語、登山用具などを表現としていかに移植するかという点で、なみなみならぬ苦心のあったことがうかがえる。リッジ、クレーパス、クローワール、リュック、ザックなど、いまからみればあたりまえのことのように使用する言葉でも、明治中葉にあってはすべからず未知の分野だった。その点、この稿本は、西欧登山文化の移入過程の歴史的証言だといえる。

ウエストーンと鳥水の出会いが偶然にして劇的なものであったことは、鳥水自身がしばしば回想文に書いてきたので、あらためて説明する必要があるが、この稿本の成立については「鎗ヶ岳の昔話」志賀利川とウエストーン(水河と万年雪の山)所収)につきの一節があるの、引用する。

△…友人岡野金次郎氏が、ウエストーンから借用したものを、更に私が、無断転借したので、早く返さなければならなかったから、私はこの本の要点を翻訳することに

山をぎれいに「三」は持ち帰る



決めた。即ち、日本の風俗習慣を説明してあるやうな外人向きの記述は、切り捨て、苟くも山に関係したところだけは、直訳といっていいほど、忠実に訳した上に、挿入の写真版にも、上から白紙を宛てがひ、輪廓をなぞり、筆の及ばないところは文字で註疏的に書き入れを施し、岩のしわから、残雪の放射の筋道に至るまで、スケッチ風の線描に写し取り、それを挿絵にして、翻訳原稿を、一巻の仮綴本に拵へ上げた、……したり顔なる当時の佛が見えるやうで、記念に今でも保存してあるが、素より私自身登山参考用の種本であるから、当初より、出版の考へは更になく、過去に於ける登山工事の遺蹟の一片として、机上に置いたままでのことである。そして本

文も、紙を儉約するために、隅から隅まで、細字で、ベタ書きの上、字句抹消、挿入、顛倒等のために、紙面狼藉をきはめ、今となっては、自分でさへ、読めない箇所もある程だから、万一、他人に拾はれても、何が何だか解りさうもないところは、せめてもの仕合せである。言ふことが後や先になったが、当時は未だペンが一般に使用されてゐない頃だから、拙稿も、無論毛筆書きであつた。だから狼藉振りが、一層目立つ。この「日本中央大山系横断記」の稿本は、昨年の秋、小島準太郎氏からはじめてみせていただいたのだが、「小島鳥水全集」編集中の私は、これを第四巻「山水無盡蔵」「不二山」ほか)に附録として収めるのが、もっともふさわしいと考えた。そのため急速、活字化しなければならなかつた。しかし実のところ七十ページにわたる文章の校訂作業では、編集部ともども多くの辛酸をなめた。鳥水のいう「転借」から返済までの時間は、一ヶ月もなかつたと推察されるので、文字は実に「狼藉」をきかめ〴〵しているのだ。時間の余裕をもつて訳出しているところはいいとしても、かなりのスピードで書いたとおもわれる箇所は、判読に苦しめられた。鳥水の文字はかなり読みこんできたつもりだが、

### ポーランド隊 厳冬期エヴェレスト登頂

ポーランド登山隊が二月十七日(一九八〇年)東南稜からエヴェレスト厳冬期初登頂に成功した。

ワルシャワ・アルパイン・クラブのアンジェイ・ザヴァダ(五十一歳)を隊長とする二十一名のポーランド隊は、今冬ネパール政府の厳冬期ヒマラヤ登山解禁第一号としてノーマル・ルートからのエヴェレストに挑戦した。ザヴァダ隊長はワルシャワの地球物理学者で、すでに一九七四年晩秋、ロイツェ(八五・〇〇)にエヴェレスト側からアタックし冬のこの地帯での登山経験者であつた。



日、サウス・コル七九六〇地点に第四キャンプを進め、第一次登頂隊レシエク・チフィ(二十一歳)、ヴァレンティ・フィユト(三十三歳)、クシシントフ・ヴェリツキ(三十歳)が入った。いま一人のヤン・フルニツキーシュルツ(三十五歳)はサウス・コルへの途中で脱落した。風は「ノーマル」、気温は摂氏零下四十度である。

第一次隊は第四キャンプ設置のため極度の疲労で登頂を断念、第三キャンプへ下り、代わってザヴァダ隊長とフォト・ジャーナリスト、リシャルド・シャフィルスキ(四十二歳)が二月十三日、第四キャンプから頂上へ向つた。しかしザヴァダは三十分後酸素補給器の故障のため断念、シャフィルスキは単独登頂したが、強風のため第四キャンプから百五十メートル登った地点で引き返した。シャフィルスキは第三キャンプまで下山したため、ザヴァダ隊長と連絡が取れず、一時遭難説が流れたが、二人とも無事であつた。

続いて第三次隊として、ザヴァダ隊長のサポートに當っていたジイグムント・ハインリッヒ(四十二歳)とシエルパのパサンが二月十五日、酸素なしで頂上へ挑戦した。当日朝の気温はベース・キャンプ零下十八度、第二キャンプ零下二十三度、第四キャンプ零下四十一度であつた。風はベース・キャンプ、第二キャンプはノーマル、曇天、サウス・コル以上は猛烈な強風(avalanche)。二人は荒天にさらされ東南稜八三五〇地点で下山、同日午後第二キャンプへ戻つた。

ここで問題が出て来た。ポーランド隊の厳冬期登山期限はネパール政府により二月十五日ま



ポニントン氏と握手する宮下副隊長 —北京にて—  
(読売新聞社提供)

小島隼太郎氏の校閲をおおぎつとも、ついにニカ所は、時間ぎれとなって、欠字表記で校了とすることになった。  
ウェストンその人とその著作は、日本山岳会の創立につながるもので、ここにはその胎動期の証しがこめられているといえるだろう。鳥水の直訳的な文章は推敲されてないが、歴史的証言のひとつとして、原文のまま提出すること

### 海外における本会の

### チヨモランマ遠征への関心

鈴木 木 郭 之

本会のチヨモランマ遠征が、二月二十七日付、ニューヨーク・タイムスに、また二月二十一日、三月六日付、ザ・タイムズで扱われたように、アメリカ、イギリスを始め各国ではこの遠征を非常な関心を持って見つめているようである。本会に寄せられた数々の手紙のうち、二、三を紹介してみる。英国山岳会元副会長、ハーバート・カー氏

「私の編纂した『アーヴィン日記』を御送付申し上げます。この本を日本山岳会の図書室に置いて下さるようお取計らい戴けることを望みます。この本はエヴェレストの歴史に重要な事実をつけ加えるものであり、一九二〇年代のパイオニア時代の偉大なドラマにかかわっています。」

二月二十二日に出発された貴会のエヴェレスト遠征隊の大事業に対して、心より幸運をお祈り

とになった。ともかく明治三十六年三月十五日の時点で、鳥水の裡にこのようなウェストン導入がなされていたことは驚嘆に値する。未知の高山深谷に魅せられていた鳥水は、「日本アルプスの登山と探検」を読みこむことによって、近代登山の精神を学び、山の実践と研究と、そして著作活動にあらたな展開をもたらしたのである。

### ポーランド隊のエヴェレスト

でとなっていた。そのためネパール政府に対し二日間の特別延期を許可してもらった。第四次隊レシエック・チフイ(二十九歳)、クシイシトフ・ヴェリツキ(三十歳)は二月十七日、東南稜より執念の厳冬期初登に成功した。頂上に立ったのは午後二時四十分と報告されている。  
一九五三年五月、ヒラリー、テンジンの初登以来第38登、これで頂上に立った人間はのべ百五人になった。

登頂のニュースは、ネパール観光省より早く、ワルシャワのポーランド国営通信PAPからロイター電で世界中に伝えられた。(このためネパール政府からクレームがつけられている)  
ポーランドは春にも引き続き別の隊がエヴェレスト南西壁の直登をねらうてすでに行動を開始している。  
なお、この春のエヴェレストはスペイン隊の一隊(隊長D・ホアン・イグナシオ・ロレント・スガサ)が東南稜より、一隊(隊長リカルド・コスト・トルジャス)はローツェから縦走をねらっている。

二月二十八日、カトマンズに下山したザヴァダ隊長とチフイ、ヴェリツキの登頂隊員が記者会見し、登頂の様態と下山途中、昨年の秋の西ドイツ隊員の遺体発見について報告している。  
二月十七日現地時間の午後二時四十分頂上に立った。七九八五メートルのサウス・コルから頂上までの所要時間は七時間半、南峰から頂上までが最も危険でオーバーハングの雪庇が重なって困難であった。頂上には四十分滞在したが、一九七五年中国隊が頂上に残した三脚が雪に埋もれたまま、まだ残っており、そのアルミニウムパイプの中にプラスチックでつままれたノートが発見された。ノートには「1979. For a good

time call Pat Riecker 274-2602 Anchorage Alaska, USA」と記されており、昨年十月三日西ドイツ隊に参加し、登頂後疲労凍死したアラスカのガイド、米国隊員レイモンド・エドワード・ジェネットの遺体も発見された。第三キャンプへの下山も困難で、一人づつ確保しながら行動したが、往復に四・六リットル入りの酸素ボンベを二本使用しただけであった。チフイ隊員は下降途中東南稜八三五〇メートル地点で、昨秋ジェネット隊員とともに死亡したハンネローレ・シュマツ夫人の遺体を発見した。彼女はゲルハルト・シュマツ隊長の夫人で、女性として四人目のエヴェレスト登頂者である。遺体は赤とライトブルーの登山服を着用し三十メートルのロープを結んでいた。その約二百メートル上方にフレーム・ザック一個、チヨコレート・カラの最後のビバーク地点だっと思われたが、ジェネットと、シェルバのジャンプの姿は見当らなかった。頂上で最も心配したことは無事に下山出来るかどうかということであった。

ザヴァダ隊長の報告によると、経験した最低気温はサウス・コルでのマイナス42度。最も暖かったのは五三〇〇メートルのBCでのマイナス18度であった。冬季におけるエヴェレスト登山は、風と寒気との戦いで、常時時速百キロ以上の強風が吹きまわっており、チベット側からの西風でいくつかのテントが破壊された。  
ザヴァダ隊長は三月から五月にかけて新しい隊を編成し、エヴェレスト西南壁直登に挑戦するが、「冬期におけるヒマラヤの八千峰はまだ未登峰であり、われわれはヒマラヤの登山史に新しい章を開いた」と力強く語った。  
(本稿はAFP、AP、UPI、ロイター電報からアレンジした) (山崎安治)

ポーランド隊のエヴェレスト

申し上げます。所謂「古い道」と呼ばれている北側からの道は、過去五十年間で、かつて訪れたものはありませんでした。従って貴会の隊員が得られる新しい情報のすべでは、世界にとってかけがえのないものであり、大変な尊重と感謝を以てむかえられること信じます。

北東稜からそれほど遠くないところに、中国隊の一人が、マロリーがアーヴィンかも知れない死体をみたという驚くべき情報に接しました。去年の秋、その中国隊員、王漆宝氏がノース・コル直下で雪崩のため死んだことは悲しいことでした。しかし五十年間、激しい風雪と極寒にさらされた衣服の状態を述べた彼の談話は、全く真実味を帯びておりました。若し、貴チームが死体を発見し、特に、何等かの遺留品、中でも酸素器具、勿論、カメラも発見されたとしたら、世界中にとってこれ以上の関心はありません。(中略)

一九二四年、六月八日の事故の原因については、酸素器具がよく作動せず、彼等は疲労してしまつたものと信じます。一方では、酸素器具が重く、また他方では、マロリーが第六キャンプから試みた登頂に対し、充分に作動しなかつたのだということが、この日記の第九章を読むと明らかであります。

貴会のエヴェレストの御成功と

貴会の御発展をお祈り申し上げます

エヴェレスト財団常務理事、V・S・ライソノ氏

「エヴェレスト北東稜斜面の八〇〇〇呎付近で英国人かも知れない死体があったと中国隊員の王漆宝氏が、昨年の十月、貴会の偵察隊員、長谷川良典氏に話されたそうです。日本の遠征隊が、エヴェレストを北面から登ろうとされており、一九七五年、中国隊によつ



て発見された死体を見つけうるかも知れないということを知りました。御承知の通り、それは一九二四年、頂上攻撃中に消えたマロリーがアーヴィンのどちらかの死体かも知れないという可能性が充分あります。

エヴェレスト財団は、この報告に大変な関心を持っており、若しも死体か、或いは、カメラが発見されたら、マロリーとアーヴィンの行方不明について、謎に包まれた状況を解きあかす一つの道

### 第十七回

## 「この一本展」より(3)

### 故野尻抱影氏の

### スケッチブック

二年前の一九七七年十月三十日に数え年九十歳で亡くなった野尻抱影氏は、星に関する啓蒙書によって天文知識を世にひろめた人であった。氏は日本山岳会の会員でこそなかったが、横浜に生まれ育って山岳会創設者たちと親交をもち、山岳会の催しにもしばしば参加した。一九〇六年(明治三十九年)に早稲田大学英文科を卒業して甲府中学の英語教師となつて四年間を甲府盆地で過した。この間に南アルプスの山々に魅せられ、小島烏水に白峰三山のスケッチを提供した。それらは「小島烏水全集」の挿画になつてゐる。白峰の山を遠望することにあきたらず、氏みずから一九〇八年(明治四十一年)夏に北岳に登つた。日本山岳会の機関誌「山岳」の同年度の最終号に長文の白峰北岳登山紀行文が載つてゐる(その文章は本名である野尻正英の名で発表された)。

作家大仏次郎の兄と呼ばれることを嫌つた氏は、「大仏次郎が私の弟なのだ」ということを口癖にしてゐた。星と文学をかたるときの氏の文章の美しさと明晰さには、大仏次郎のそれと相通じるものがある。そればかりでなく野尻抱影は絵画になみなみならぬ関心をもちつづけ、みずから鉛筆をとる人もあった。画家になりたいと思わぬでもなかった、と人にもらしたこともある。

甲府中学時代の氏のスケッチブックがこれである。昭和三十年代に氏の家が火災に遭つたた

め、多くの貴重なるものが失われたため、このスケッチブックはとりわけ貴重である。人物画、風景画など、さまざまな絵を収めたこのスケッチブックだが、甲府市内から、あるいはのちに深田久弥の死地となつた茅ヶ岳からの南アルプスのスケッチは、科学する人の写真精神と自然美を汲もうとする風流心とをかねそなえていて、今日でもみずみずしさを保ちつづけてゐる。

今回の年次晩餐会の「この一本展」のために、私の願いをこころよく受けてくださった野尻抱影氏の娘婿堀内彦男氏に深く感謝し、たく思う。そして日本山岳会の会員たちに、終生日本山岳会に理解と愛情を寄せつづけた野尻氏の存在をあらためて認識していただきたく思う。

宮下啓三

### アルプス山とライン河

文学士 中目覚著

日本山岳会が生れる以前に欧州アルプスを訪れた日本人登山者の記録として大変珍しい書物だが、くわしいことは拙著「登山史の発掘」に述べてあるので、ここでは触れない。

「登山史の発掘」は会員横山厚夫氏に編集をいっさいおまかせして、お骨折りいただいたのだが、「東アルプス日記」は明治三十九年十月三日ウィーンで脱稿、十一月二十六日から十二月一日の「東北新聞」に連載、また「瑞西めぐり」は明治三十九年十一月二十八日パリで稿了、同年十二月一日からこれも「東北新聞」に載せたことあり、どういふルートで欧州から日本へ原稿が送られたのか、横山氏と二人で頭をひねつた。日露戦争直後で、すでに電信などを利用したものであろうか。

山崎安治

につながるかもしれません。日本隊がたとえどんなものでも何か発見して戴ければ、全く感謝にたえません。

遠征隊の御成功をお祈りし、エヴェレストの頂上を極められんことを心から願っております」

英国山岳会、中国登山準備委員会理事、チャールズ・クラーク氏

「私は一九八一年、英国の中国登山の準備に入っております。貴会の一九七九年の偵察隊の状況をお知らせできれば誠に幸せと存じます。(中略)英国山岳会は、日本山岳会に御挨拶を申し上げ、一九八〇年の貴会のエヴェレスト遠征の輝しい御成功を期待しております」

アトランティック山岳会々長、トム・ホルツェル氏



### 図書紹介

#### 高峰への挑戦

—高所における自己管理技術—  
村井 葵 著

この本は、昭和四十七年「岳人」に連載されたものに手を加えてまとめたものである。一九六五年、

「前略。私は中国も知っており、当時の駐北京アメリカ大使、ジョージ・ブッシュ氏(現在、共和党より大統領選立候補)の御助力をおおき、一九七六年、中国アメリカ合同エヴェレスト登山隊を組織しようとして試みしました。(中略) 貴山岳会々員諸氏は、貴山岳会の今回の歴史的な登頂に対し、全く興奮を禁じ得ないものと拝察いたします。頂上攻撃に輝かしい成功を収められんことを心から願いますと共に、英国の登山家の発見をも期待しております」

(海外連絡委員会)

ローツェ・シャル遠征に参加した著者が、第二キャンプで突然意識を失い、一ヶ月後に回復した。その貴重な経験を生かして、ドクターでない著者が、敢えて、難かしい高所医学へ執念を燃やして仕上げた書である。内容を順にひらいてみると「異常な体験からひらいてみると「高所医学のことは、専門家のドクターに任せておけばいい、という他力本願的な考えは、苛酷さに耐えなければならぬ高所登山では通用しない」という主張から「高所における自己管理」は、もっとも重要な登山技術

#### フーカーの初版本

この本をいつ、どこから仕入れたかは、すっかり忘れてしまった。だが第一巻の表紙裏に鉛筆で、42/51と書いてあるところを見ると、英国からであることは確かだ。

年をとると共に、私のところにある本でも、百年以上経っているのが段々と増えてくる。家にあるジョセフ・ダルトン・フーカー(うるさく言えば、ジョウジフ・ドルトウ・フーカー)の「ヒマラヤン・ジャーナルズ」(一八五四)もその一つで、出版されてからもう二五年の歳月を経ている。

今度、薬師君が四年がかりで訳し、白水社から出版したフーカーの「ヒマラヤ紀行」は、驚嘆すべき労作であるが、私にとっては特に「訳者後記」がよかった。

ところで薬師君の、これも労作の一つ、「ヒマラヤ関係図書目録」(一九七二)は、私も屢々利用している虎の巻だが、そのフーカーのと

のひとつであるという結論に達する。

「六〇〇頁の生体実験」では航空医学実験隊で被検者となった自己のデータ分析を述べている。

「生命力の退化と生活限界」ではチリの硫黄坑で働くインディオたちの生活環境より「永続性のある高度馴化のための限界高度は、五五〇〇に近辺である」と推論している。

「高所生理学」「高所障害の症例とその対策」は主題であると考えられるが、ドクターにとっても、難解な生理学、解剖学、病態生理

学や各科にわたる臨床医学用語が沢山出てくる。読者に理解できるように述べることも最も難かしい所である。

「高度障害による遭難例」は、一八九五年のナンガ・パールバットから一九七九年までの主な事例を五十九頁に抄録してある。高所における登山医学は、いまだに体系だった研究が行われていない。これは、あの苛酷な環境に近代医学の研究施設を持ち込むことも、また、そこで精密な検査等を行うことも至難であることにもよるが、登頂という華ばなしに目を奪われ、あまり顧みられなかったことも理由の一つとしてあげられるであろう。一般に高所登山に興味のないドクターにとっては高所医学の知識は浅い。むしろ、高峰登山を志す人達のほうが、より切実に理解しようとする。

ころをみると、初版(一八五四)は第一巻が、xxiii+408(冊)、第二巻が、xii+367(冊)で、大きさは両方とも23x15(cm)となっている。そこで自分のを調べてみると、頁数は同じだが、大きさの方は23x14であった。しかし図版はカラー(他の版は全部白黒らしい)になっているから、初版本である。サイズが違うのは、百年前のある所有者が製本し直した時に、縦横を一瞥づつカットしたと考えられないこともない。

—了—  
吉沢一郎

「この一本展」より

誤りに気づくが、全編に流れる『自己管理』の重要性は充分にみるとることができる。しかし、本書は、有名な登山家によるものであるから、過ちをそのままにしておくにしては、影響力が大きすぎる。改版時には、是非、高所登山医学に詳しいドクターのアドバイスを得て、より平易で理解し易くしてほしい。そうすれば、この道を志す登山家にとって好個の書となることは間違いない。

四六判 二二五頁 一九七九年  
一二月 岳(ヌプリ)書房刊  
定価 一五〇〇円

(河村栄二)

Himalayan Journal  
Vol. XXXV 1976-77-78  
Golden jubilee 1928-78

前巻から三年ぶりに刊行されたHJ35巻は、HC創立五十周年の記念号であり、一九七六～七八年の二年間をカバーしている。HCは一九二八年にG・コーベット卿、K・メイスン等によって設立されたことは、いまだには知る人も多いが、五十年を経過した一九七八年には、その記念行事がデリーで挙行され、本会からも西堀会長が出席されたことは、「山」三九四号に記載されている。創立会員の多くは、既に鬼籍に入ったが、最も有力なメンバーの一人であったメイスンが、僅か二年前に死去しているのは、惜しまれる。

本号は記念号にふさわしく、巻頭に「ヒマラヤン・クラブ物語」と題する56頁に亘る文章が掲載されている。筆者は John Martin で、全体を(一)クラブ設立前のヒマラヤ(二)クラブ設立前のヒマラヤ(三)四七年、英国の時代、(四)一九四七～五四年、過渡期、(五)一九五四～七八年、新しい時代、の五期間に分け、会の五十年史を主としてHJの内容と、残された役員会議事録から述べている。HCを知ろうとする者にとっては、看過できぬ好文たるを失わない。

次に多年、名著書記であったT・ブラムによって「五十年一回顧と展望」という七頁の一文があるのも、勿論記念号としての企画で見のがすことが出来な。

さらに記念号の企てとして、過去(戦前)のHJから五篇が再録されているのも興味がある。第五巻からE・アルワインの「パッサラムとタールン谷」第七巻からティルマンの「ナンダ・デヴィ」第八巻からシプトンの「エベレスト偵察」第十巻からスペンダーの「シャクスガム遠征」第十一巻からG・オズマストンの「ガンゴトリ三角測量」などがそれで、みな当時の読者には懐かしいものばかりである。

他の内容の主なものには「エベレスト・一九七六」「ローツェ・一九七六」「ローツェ第二登・一九七六」「マカル・一九七六」「第

三回韓国マナスル・一九七六」「ダウラギリ四峰」「北方からのナンダ・デヴィ」「シェルピ・カンリ・一九七六」等々で、紙面の関係で詳しく触れられないのは残念である。

HJとして特色のある Expeditions & Notes 欄は30数頁にわたって各国の遠征記事がよく集められてあり、また一九七五～七七年の遠征が表示されているのも、前号同様有効な資料と言えよう。

追悼欄にはE・シプトンについて僚友H・W・ティルマンが書いているが、そのティルマンも行方不明が伝えられて久しいのではないかと。シプトンの息子さんが父の思い出を書いているのは珍らしい。

図書欄には、五百沢智也氏の「Teiking in the Himalaya」が採り上げられ、トレッカーにとつて極めて優秀な刊行物であると讃辞が呈されている。

最近のHJのなかでは、五十年記念号ということもあり、読みごたえのあるものがあって面白かった。表紙は、HJとして多分初めての色刷りで、ナンダ・デヴィ双峰の写真であり、本文中にも写真図版が多いが、写真の印刷がよくないのは惜しい。

編集者はS・S・メタ氏でカバディア、ホウキンズ両氏が援助している。一九七九年刊、三六四頁、Rs 70.00。(望月達夫)

### 越後の山旅・下巻

藤島 玄 著

著者のライフ・ワークともいえる下巻が発行された。著者は昭和三十五年にも同名の本を出しているが、今回のは単なるその改訂増補版ではなく、全部書き直した新版である。

下巻は中越と上越の山を中心にまとめられ、地域概念図から始まり一等三角点の山、気象、地質、植物、動物、高山植物目録を巻頭に守門、浅草、谷川連峰、苗場山塊、鳥甲山、岩菅山の中越編、米山、越後三山、荒沢岳、巻機山塊、妙高、火打、雨飾、海谷山塊、明星山、白馬連峰と越後の山の案内がすべて収められている。

巻末に登山道、山小屋、バスの照会案内がくわしく記され、越後の山のガイド・ブックとして完璧さを期している。いずれのコースもすべて著者自身の体験に基づいており、これはちよっと真似の出来ない努力の結晶といえる。

本書の特色としては、各山岳ごとに古文獻からその山に関係ある箇所を引用してあることで、北越風土記節解、越後名寄、新編会津風土記、越後野志、北越略風土記などちよっと手に入らない文獻の転載されてあることはまことに有意義なことである。

や、初期の登山記録について、まとめてあればさらに役に立ったであろう。ということは、これは現在著者に期待するほかないからである。

昭和五十四年十月、富士波出版社発行、四一七ページ、写真多数、定価二〇〇円 (山崎安治)

### 速報

1 …… チョモランマ隊より

「珠穆朗瑪」来信(折井副会長宛) 三月二日付(宮下秀樹)ルクズにてラサから三八〇キロのバス旅行で西藏第二の都市三八〇〇のシガツエ(ルクズ)にやって来ました。此処はシッキム路との交差点、英国隊の通ったところです。この砂ボコリの中をキャラバンしたのでから昔の人は立派ですね。若い連中は予想通り強く頼もしく思っています。私もまあまあ酒が美味しく飲めるのもう少し上まで頑張れるでしょう。明日シガールに発ちます。

三月六日付(浜野吉生) B・Cにて西藏高原を横断してロンブク氷河の舌端にベースキャンプを設営しました。万物は凍てつき春の兆は見えませんが、「国の女神」チョモランマは頂上岩壁から雲の羽根飾りを東にたなびかせ、威圧感に相応なものです。間もなく北東稜の本格的な荷上げを開始します。

三月三日(神崎忠男)シガールにて  
二月二十六日計画通りラサに入り  
ました。隊員も皆元気で良い仲間  
ばかりです。二十九日にはラサを  
発って三八〇キロ約十二時間、埃  
と闘い乍らルグズに着きました。  
此処ではじめて服務員と面会し、  
最後の登山準備をして三月三日B  
・Cまであと一日、最後の都市シ  
ガールに着きました。明日はトラ  
ックの点検をして、三月五日、い  
よいよB・Cに向います。B・C

は川が凍結しているのではないかと心配しています。  
三月十二日(伊丹紹泰)B・Cにて  
三月五日待望のロンブクベース  
キャンプ(五一五〇)に入りま  
した。入山以来天候が悪く強風に  
悩まされました。併し北壁側C1  
(五六〇〇)へのヤクに依る輸  
送も終了し、十三日から神崎さん  
とC1からC2(六一五〇)へ  
登って行きます。取り急ぎご報告  
まで。(文責・折井)

●各委員会のお知らせ

・本会のUIAA(国際山岳連盟)の  
退会と共に、日山協が加盟

海外連絡委員会

去る昭和四十二年、UIAAより  
本会に対し加盟の招請があった  
が、当時の松方三郎本会長と日  
山協榎有恒会長との間で取りかわ  
された書簡にもつき、本会が引  
受けることになり、同年十月、ス  
ペインのマドリッドで開催され  
一九六七年年度次総会において本  
会の正式加盟が決定され、以来十  
二年間、日本を代表して総会に本  
会々員を派遣してきた。しかし、  
負担金の値上げと共に、昨年十

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

十二ヶ国で、四十九の山岳団体よ  
り構成されている。  
最後に、過去何度も出席の労を  
いとわず尽力下された吉沢一郎名  
誉会員や佐藤テル氏等に感謝の辞  
を述べたい。  
・上高地山研  
五月三日にオープン  
山研運営委員会  
上高地に春がきました。紫色に  
けむる木立ごしに眺める残雪豊か  
な穂高、霞沢岳が魅力的です。今  
年の山研はゴールデン・ウィーク  
の五月三日に開所いたします。  
積雪の状態によって、開所当日  
は、何かとご不自由をおかけする  
かも知れませんが、三日から宿泊  
できるように準備いたします。三  
日に宿泊ご希望の方は、早めに事  
務局までご予約ください。  
山研は設立七年目を迎え、今年  
こそ独立採算で賄えるよう運営委  
員一同、管理人の津村夫妻も張り  
切って、皆様をお待ちします。  
燃料費をはじめ諸物価高騰にも  
かわからず、利用料は据置きにい  
たしました。会員が非会員をお誘  
いあわせ下さって、積極的にご利  
用願うための措置です。ご協力を  
お願いいたします。

- 会員 一、五〇〇円  
非会員 二、五〇〇円  
小学生 一、〇〇〇円  
子供 八〇〇円  
(高本)



尾崎喜八氏の  
レコードと詩碑

詩人尾崎喜八の作品は、創文  
社刊の詩文集によってほぼ全容  
が伝えられているが、このほど  
詩人の声の遺産がフィリップス  
・レコードから発売された。「尾  
崎喜八・音楽への愛と感謝」で  
第一面が「花と小鳥と笛」、第  
二面が「田舎のモーツァルト」  
と題された、自作の朗読と音楽  
との組合せ。尾崎さんの詩は、  
かつて深田久弥氏が何かの折  
に、格調があって朗唱することに  
ふさわしいという意味のことを  
語っていたが、「復活祭」や「か  
けす」など、詩人の代表作が詩  
人自身によってみごとにうたわ  
れている。定価二五〇〇円。問  
合せは、東京四七九一三七一五  
へ。  
また、詩人の記念碑が二つ、  
近く完成する。一つは四月下  
旬、西上州御荷鉢山の一角。「父  
不見御荷鉢も見えず神流川 星



ばかりなる万場の泊」など「神  
流川紀行」の一節を刻んだも  
の。あと一つは、信州富士見に  
地元有志によって自然石の碑が  
建立される。(大森)

速報 2

3月23日付(渡辺兵力)ペースにて  
JAC隊員、全員元気で入山。  
宮下、浜野両副隊長も、それぞ  
れABCに向っています。ペー  
スはもう数人しかおりません。  
数日後には二、三人になりま  
しょう。今のところ計画より、五  
六日おくれたペースで万事が進  
行中ですが、大体調子よく進ん  
でいるといっています。思いま  
す。老生も五一〇〇で暮すこ  
とができそうなどところまで馴化  
してきました。そのうち周りの  
六〇〇〇級の峰へ足ならしで  
もやろうと思っています。皆様  
によるしく。(編集宛)

東西南北

・雪崩講習会報告

遭難対策委員会  
学生部委員会

冬山シーズンむかえて、雪崩による遭難をなくすることを目的に、12月6日17時より岸記念館において、恒例の雪崩講習会をおこないました。今回は、52名12大学の現役部員と一般5名をむかえ、川上理事のあいさつにつづき、若林氏より人工雪崩の貴重なフィルムを見せていただきました。つづいて、既に出題されてきました5つの質問に(「山」114号掲載)答えるというかたちで、東大・日大・専修・芝工・明治の現役より熱心な発表がおこなわれました。金坂委員長総評としては、解答のポイントのズレや結論をはっきりさせること、参加者の準備と積極的質問の不足など厳しい指摘があり、一問づつ正答が与えられた。

次に若林氏より最近の雪崩研究でわかったいくつかを発表していただき、最後に菅沢理事より、この講習会を機に各自もう一度勉強し冬山では、決して事故をおこさないようにとの閉会の辞で終了しました。なお、この講習会の報告書希望の方は、学生部まで申し込んでください。(今野記)

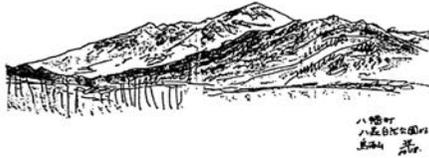
・第24回山スキー

技術講習会報告

指導委員会

今回で24回目を迎えた山スキー講習会は、豪雪で名高い鳥海山の麓で行われた。天候には恵まれなかった反面雪には恵まれ、地元岳連の小野氏の御協力もあり、まずまずの成果を収めることができた。

10日は、金坂講師の朝の予言が的中し、下山開始間もなく沢筋で小雪崩が発生し、「雪崩はまむしの様なもの」等の名言と共に、現



場での雪崩の勉強もすることができた。

11日10時に桐生、駒宮、猪之奥を全員で見送り、つづいて金坂委員長より実地に雪崩の原因・構造や雪の結晶などの説明をしていた。特に昨日小さな雪崩にあった。午後は自由時間となり、各自スキーを楽しんだ。全員無事の有益な会であった。

2月8日 上野駅夜行発  
2月9日

9時20分 鳥海山登山口出発  
11時20分 湯本屋到着  
13時~16時 山スキー練習  
18時 夕食後ミーティング  
2月10日

8時15分 出発  
11時20分 鳳来山中腹  
11時45分 下山開始  
13時 帰宿

・雪害実験研究所の見学報告

科学研究会  
集委員会

長岡市に国立の雪害実験研究所がある。ここは科学技術庁・防災センターの研究所群の一つであるが、本年三月一日にここを見学した。

東京から十八名、越後支部から二十三名参加した。

見学したのは積雪層の初期移動と雪崩への移行の観察設備、積雪量の連続測定と観測値の電送、低温実験室、雪上性能実験自動車、せまい通路の除雪車、太陽熱による屋根の融雪実験、などであった。

\*は斜面の下にトンネルを掘って天井から積雪の底面を観察するようになっていた。

雪はシキター(粒子の接触点が除々に固結する現象)して体積を縮少するし、斜面では重力によってクリープ(力の方向に少しずつ

14時~17時 自由練習  
18時 夕食並びに懇親会  
2月11日 朝食後解散

講師 金坂一郎、川上隆、桐生恒治、奥原幸、駒宮博男、今野善郎、猪之奥逸記、小野功次(地元岳連)  
講習生 斉藤健治、山崎直人、久保孝一郎、原謙一、林桂子、荒野康子  
(駒宮記)

この限界を越える積雪層の破壊が起って雪崩になるが、クリープの限界で速さが大きくなるので、そのデータを集めている。

また積雪層の底面は摩擦で地面から支持されているが、上部には、それが無いから、ザリ歪を生じ、割目ができる。これも雪崩の前徴となる。などの説明を受けた。

長岡の雪と、山の雪は違うことが多いようだとも思ったが、ここは豪雪地帯に人口が密集して生活している点で世界でも珍しい所らしいので、大変有意義な研究であると考えられ、深甚な敬意と感謝を以て辞去した。

長岡市内のそば屋で昼食と宴会を支部の方々からして頂き交歓を深め、バスで松の山温泉に向った。

この日は異常気象で、沖縄から札幌まで全国的に雨が降ったので、松の山への道筋は凄まじい雪崩の状態が沢山見られて、見学会としては得難い機会に遭遇した。

松の山温泉では白川館に泊った。ここでは十二月から三月中旬までスキーには乗らないことになっている由で、翌三月二日は町民スキー会を越後湯沢でやるのでバスを仕立てて行くと云う。

この雪崩の状況では尤もな事だと我々も二日は朝から六日町南スキー場に送って貰い、スキーで遊んだり、シールを付けて隣りの尾根を辨形山に登ったりしてエキスカーションを楽しんだ。

終りに御欲待下さいました越後支部の方々に厚く御礼申し上げます。

参加者 順不同(東京より)小倉厚、片岡博、小原晴子、斉藤桂、梅野淑子、久保孝一郎、坂本正智、折井健一、関塚貞亨、越田和男、武田満子、松丸秀夫、遠藤慶太、中川武、村木富士、渡辺正臣、中沢光江、沢井政信

(越後支部より) 藤島玄、斉藤平七、井口正男、奥津五郎、柳沢一男、藤井信、室賀輝男、山田一男、山崎幸和、早川英夫、坂井厚、松本英一、佐藤信、清野正二、堀井浩、佐々木幸作、杉本敏、金山淳二、安野正弘、佐藤金一、佐藤高志、大橋栄蔵 (松丸秀夫記)

・東良三氏の旧蔵本

図書委員会

今回、本会図書委員会は次の三  
点の貴重本を購入した。そのいき  
ついでに誌しておきたい。

1. Meyer, Dr. Hans.

Across East African glacier.

An account of the first ascent  
of Kilimanjaro. Translation from  
the German by E.H.S. Calder.

London, Philip, 1891.

2. Fitz Gerald, E.A.

Climbs in the New Zealand  
Alps. New York, Scribner, 1896.

3. Zurbriggen, Mattias.

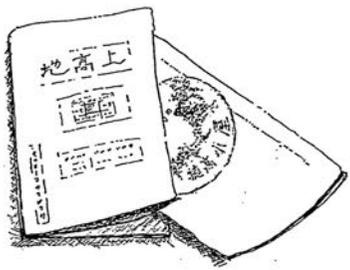
From the Alps to the Andes.  
being the autobiography of a  
mountain guide. Translation from  
Italian by Miss Mary Alice Vial-

ls. London, Fisher Unwin, 1899.

1と2は神田の一誠堂書店で見  
つけた。いずれも大型のずしりと  
重い、いかにも稀覯本そのもの  
で、見ると東良三という印が押し  
てある。東良三氏といえは、いう  
までもなく、アラスカ探検の先駆  
者である一月二十五日(一九八〇  
年)九十一歳で他界された方であ  
る。

価格は二冊とも三万八千円とラ  
ベルが付されている。とても手が  
出ない。あきらめ切れず家に帰っ  
て調べて見ると昭和十年五月、日  
本橋丸善で開催した本会の「山岳

図書展覧会」目録に1、2とも出  
品されており、小林義正氏から小  
生にゆずられたその目録には、い  
ずれも東良三氏の出品と小林氏が  
記入されている。(この目録は山  
岳第三十年第一号の付録として出  
されているが、出品者の記入はな  
し)



目録には次の解説が書かれてお  
り、ともに松方三郎氏によるもの  
といわれる。

1、キリマンジャロ初登攀(一  
八八九)の記録を独逸文から英訳  
したもの。著者マイヤーは一八八  
七年に初めてこの山に志し、一八  
八九年漸く最高峰キボロ登頂に成  
功した。

2、ニュージーランド登山史に

名を残すフイツツジェラルド(一  
八七一―一九三二)の一八九四―  
一八九五年ニュージーランド行の  
記録である。当時問題のマウント  
・クックは彼の到着に先立ち登頂  
され、彼はニュージーランド最高  
峰初登攀の機会を失ったが、セフ  
トン、シリーイ、タスマン、ジルバ  
ーホルンの登攀に成功して帰国し  
た。本書はマコーミックの挿絵と  
著者の撮影になる写真が挿入され  
て一八九六年刊行されたが、彼に  
は他に一八九六年のアンデス探検  
を記録した「The Highest Andes  
(1899)」なる著述がある。

二冊ともこの展覧会に出品され  
た東氏の架蔵されていたものである  
ことは疑いなく、1、2とも目  
録の解説のコピーがはさまれてお  
り、それを裏書きしていた。

望月達夫氏と越田理事に三月三  
日の評議員、理事会のときこのこ  
とを相談し、何としてもルムのこ  
図書室に備えよう、ということに  
なり、翌日、小生は急いで一誠堂  
に駆けつけ入手した次第である。

丸善の展覧会から四十五年ぶり  
に収まるところへ収まったという  
感じで、これも何かの縁である  
う。それにしても目録に出ている  
出品者のうちお元気なのは、島田  
巽、国分貫一、田辺主計、浦松佐  
美太郎のお四方だけとなった。

3もいまではちよっとお見にか  
かれぬ貴重本で、フイツツジェ

ラルドのガイドとして同行したツ  
ルブリッゲンが一八九七年一月、  
単独南米の最高峰アコンカグア初  
登頂を行った記録である。この本  
も神田の小宮山書店に並んでいる  
のを発見し、九千五百円で会で購入  
した。  
「T・H・ソマヴェルの油絵―ロンブク氷河からの  
エヴェレスト、一九二四」複製画配布について

海外連絡委員会

一九二四年の英国のエヴェレス  
ト遠征隊々員であったハワード・  
ソマヴェル(一八九〇―一九七五)  
の描いた北面よりのエヴェレスト  
の複製画が、英国山岳会の会長、  
ピーター・ロイド氏の説明文と共  
に会に寄贈された。  
「戦前のエヴェレスト遠征は、チ  
ベットを通過してアプローチがなざ  
り、一九二四年の遠征は、戦前の遠  
征の中で、最も重要で且つ劇的な  
ものでした。最初の頂上攻撃で、  
E・F・ノートンとT・H・ソマ  
ヴェルは二万八千フィートを越え  
る高さ、即ち頂上まで千フィート  
足らずのところまで迫りました。  
この記録は二十八年後、南面から  
スイス隊が攻撃をかけた時まで破  
られませんでした。第二の攻撃は  
ジョージ・リー・マロリーとアン  
ドルー・アーヴィンによってなさ  
れましたが、彼等は二度と帰って  
きませんでした。そして今日まで  
何処で、どうして、彼等が消えた  
のか謎のままになっています。  
ハワード・ソマヴェルは希有の



才能の持ち主で、多くのことをなしとげました。彼は、登山家であり、外科医であり、医療伝導事業にもたずさわり、画家でも音楽家でもありました。一九二四年の遠征で、彼は数多くのチベットの風景やエヴェレストのスケッチや、また水彩画を描きました。この画は、英国山岳会のコレクションの中にあり、彼の数少ない油絵の一つです。そして山の構造を忠実に描いているのみならず、チベットの風土の感じを、際立った描写で適確に描いています。(中略)



この絵の売上の収入のすべては、エヴェレスト財団にいられ、世界の山岳の探検と調査を援助する目的で一九五五年に設置された寄附金にくみいれられます。なおこの絵の複製(絵柄のみ)×33 ケンドール・フランク・ピーターズ社(製)の配布を英国山岳会が申し出ております。この複製画の購入希望者は、送料共 四千二百円です。本会事務局まで現金をそえてお申し込み下さい。五月二十日まで申し込みを受け

### 東九州支部二十周年記念山行のご案内

お知らせ  
期日 昭和55年5月23日～25日  
目的地 九重山  
ミヤマキリシマとシャクナゲの群生する美しい山です。当支部もやっと成人式を迎えました。そこで懇親会を手近かな山でと計画しました。

以上三コースです。後日各支部へパンフレットをお送りします。  
連絡先  
〒870大分市府内町1の3の16  
サニースポーツ内  
日本山岳会東九州支部  
Tel 0975-32-0926  
0975-35-0256(時間外)

- C 久住山
- B 大船山
- A 黒岳ー大船山ー久住山

### 会務報告

#### 評議員会

(3月3日午後6時 本会ルーム)  
出席者 望月、織内、佐藤、山本、水野、木下、河野、山崎、金坂、村木、大塚、高遠各評議員  
西堀会長、折井、渡辺各副会長、飯野、中島各常務理事  
委任 田口、朝比奈、大田、小原(各)各評議員  
●議題  
▽監事一名推薦の件  
片岡博監事が昭和54年度任期満了のため、定款第14条4項の規定により、慎重に審議の結果、鳴原啓佑氏(四一八六)を監事候補者に推薦する。  
3月理事会  
(3月3日午後6時30分 本会ルーム)  
▽出席者 西堀会長、折井、渡辺各副会長、飯野、中島、中川、鈴木、川上、越田、中村、山口、菅沢、高本、高橋、岡沢各理事  
水野、村木、山崎、金坂、大塚各評議員  
▽委任 大森、小倉、嵯峨野各理事  
事、片岡監事、宮下理事(在中)

### 国)

◎審議事項  
▽昭和55年度事業計画及び収支予算について (中島、飯野) 各委員会より提出された事業計画及び予算はさらに精査し次回理事会までに詰める。了承  
▽東九州支部創立20周年記念行事の件 (中島) 全面的に協力する。承認  
◎報告事項  
▽チヨモランマ登山の件(渡辺) 先発隊は2月22日に出発し、計画どおり順調に進んでいる。本隊は3月5日出発する。会報用に隊独自の記事を直接本会へ送稿することになっている。  
▽新入会員オリエンテーションの開催について (中川) 3月22日開催。新入会員は一二〇名前後である。  
▽海外連絡委員会 (鈴木) チヨモランマ登山に対する世界各国からの問合せが多数寄せられている。

### ルーム日誌

(55年2月)  
4日(月) 理事会 指導委員会  
5日(火) 集委員会 婦人懇談会  
12日(火) 婦人懇談会  
14日(木) 明治大学山岳部集会  
15日(金) チヨモランマ登山隊 壮行会(私学会館)  
16日(土) 婦人懇談会セミナー

## ソ連・カフカスの山旅

～80・夏は8月8日(金)～8月22日(金) 15日間～  
◎エルブルース山(5,633m) 登頂(希望者)  
◎夏山アルペンスキー  
◎氷河と花の小旅行、その他多彩!  
※カフカスはレールモントフなどロシア文学の郷里です。  
=ソ連の山と旅の専門旅行社=  
案内書呈 (株)日ソ旅行社 政府登録一般第98号  
東京都渋谷区千駄ヶ谷1-20-1  
担当:石元昭 404-1751(代) | 〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷1-20-1

19日(火) 婦人懇談会  
25日(月) 図書委員会  
26日(火) 婦人懇談会 自然保護委員会  
29日(金) キシュトワール・ヒマラヤ登山隊報告会  
今月の来室者 二八二名  
会員移動(2月)  
物故  
九四〇 山井基福(2・1)  
81才  
四二五七 片山欣弥(54・2・21)  
57才(届55・2・12)  
四〇七三 小林幹三郎(2・29)  
67才  
改名  
六八七二 坂本智郎↓親晃へ

図書受入報告

図書委員会

昭和54年9月受入れ図書

- 1~16. 世界探検全集 全16巻 1977~78 河出書房新社
- 1) マルコ・ポーロ 青木富太郎訳「東方見聞録」
  - 2) イブン・バットウダ 前嶋信次訳「三大陸周遊記」
  - 3) ビントー 江上波夫訳「アジア放浪記」
  - 4) ステラー 加藤九祚訳「カムチャッカからアメリカへの旅」
  - 5) マンゴ・パーク 森本哲郎・広瀬裕子訳「ニジェール探検行」
  - 6) ハーンドン 泉靖一訳「アマゾン探検記」
  - 7) セミューノフ 樹下節訳「天山紀行」
  - 8) リヴィングストン 管原清治訳「アフリカ探検記」
  - 9) ブルジュワルスキー 加藤九祚訳「黄河源流からロブ湖へ」
  - 10) チェリー・ガラード 加納一郎訳「世界最悪の旅」
  - 11) アンドリウス 白木茂訳「恐竜探検記」
  - 12) ヘディン 梅棹忠夫訳「ゴビ砂漠探検記」
  - 13) ル・フェーブル 野沢協・宮前勝利訳「中央アジア自動車横断」
  - 14) ヘイエルダール 水口志計訳「コンティキ号探検記」

- 15) ハント 田辺主計・望月達夫訳「エベレスト登頂」
- 16) ハーラー 近藤等・植田重雄訳「石器時代への旅」(版元寄贈)
17. J. ブラッシュフォード=スネル A. バランスタイン編 植村直己監訳「探検・エキスパートへの道」1979 日本交通公社(版元寄贈)
18. 上田豊著「残照のヤルン・カン」1979 中央公論社(版元寄贈)
19. 近藤等著「アルプスに光みなぎる時」1979 東京新聞出版局(著者寄贈)
20. 式正英著「自然の博物誌く山>」1979 日本放送出版協会(版元寄贈)
21. 深田久弥著「九山句集」1978 卯辰山文庫(版元寄贈)
22. 山里寿男著「旅のスケッチ手帳」1979 山と溪谷社(著者寄贈)
23. 山里寿男著「山のスケッチ手帳」1979 山と溪谷社(著者寄贈)
24. 日本岩登協会編・発行「プタ・ヒウンチュリ西陵」1979(版元寄贈)
25. 朝日新聞社編・発行「シルクロード」1979(版元寄贈)
26. 東京都立航空工業高等専門学校編・発行「中央アルプス将菜頭山遭難報告書」1979(版元寄贈)

関西支部・図書に関する小史(つづき)

- The American Alpine Journal Vol. 12, Number 2, Issue 35, 1961
- The Geographical Journal Vol. CXXVII, Part 3, September 1961
- 昭和38年 文書図書 大賀寿二, 阿部和行, 矢戸元, 野村哲也 図書費 4,715
- 昭和41年 家主よりルームの賃借料の大巾値上げの申入れにより30年に及ぶルームの閉鎖。大阪スポーツマンクラブに事務所を移す。
- 昭和45年 支部長 今西寿雄
- 昭和47年 図書 竹尾宗和, 松浦輝夫
- 昭和50年 9月7日 支部蔵書を今西組の一室に移管, 終日

をかけて虫干しを行う。書架二基購入  
 昭和52年 委員 村井葵, 杉本秋之介  
 9月4日 虫干し  
 10月31日 和書総合目録作成  
 11月19日 今西支部長より627冊の寄贈, スチール本棚2基購入 整理。目録は別途整理作成中  
 以上は主に支部報連載「関西支部の戦中戦後」①~⑥(富田健一氏著)より図書関係の記事を拾って集録したものです。図書と支部の深い因果関係を知ることができます。先達の意思を受け継いで、図書の管理と充実を心がけねばならないことを痛感させられます。  
 一了一  
 (この小史は関西支部図書委員の覚え書ともいえるもので、原著者富田健一氏の意図を充分に表現しているとはいえない。といった趣旨の手紙を村井, 富田両氏から頂きました—編集)

名称訂正  
 二二四〇 芝浦工業大学学友会山岳部→体育会山岳部へ  
 ●お知らせ  
 ・山菜山行 集委員会  
 山菜山行を次の様に予定しております。  
 日時 6月7日(土)~8日(日)  
 場所 甲子岳登山後甲子温泉へ  
 宿泊 二岐温泉  
 交通 東京よりバス利用又は現地集合  
 申し込方法等詳細は後日連絡致します。  
 ・第18回木暮理太郎翁 碑前懇親会開催  
 日時・場所 5月17日~18日 山梨県金山平 有井館(0551-5-0151)  
 会費 一泊二食付六千円  
 申込 5月10日までルーム事務局  
 現地責任者 山村正光(0551-5-0151)  
 甲府市武田3の6の27  
 ●語句の正誤 会報47号5頁4段  
 目今井雄次は今井雄二、6頁4段  
 目今井正二は今村正二氏の誤りです。お詫びして訂正いたします。  
 昭和五十五年四月二十日発行  
 102 東京都千代田区四番町五一四  
 サンビュウハイツ四番町  
 発行所 法人 日本山岳会  
 編集代表 西堀栄三郎  
 岡 沢 祐 吉  
 電話東京(03) 四四三三  
 振替口座東京三一四八二九番  
 東京都港区赤坂一丁目三番六号  
 株式会社 技報堂